

# 対馬文化財通信



この絵を通じて対馬の歴史の深さを知ってほしいです。

No.776 対馬 久田中学校 3年 山根 那津乃 「歴史の深い対馬」

対馬市文化財保護審議会編



## 演題 絶やすることなく

今年の仁田中学校の文化祭、体育館全体が独特のリズム、歯切れのよい綾（あや）を切る音に包まれました。不思議に響く太鼓と鐘空を舞う綾。私たちはいつの間にか舞台に見入っていました。舞台で行われていたのは「あやきり」という、私の住む瀬田地区に遠い祖先から伝わっている盆踊りです。基本はひょうしをとる太鼓と唄い手が一人ずつと八人の踊り手から構成されています。



踊り手は両手の指の間に綾をはさみ持ち、頭はハチマキをしめま

す。そしてじゅばんを着て、たすきをかけて踊ります。あやきりの歌詞は源兵というすぐれた船頭が藩政の用務をおびて城下の厳原港から鹿見に船着きするまでの名勝や難所、舟の操縦を唄ったものです。

しかし、この踊りの確かな伝来と歌詞の作者は知ることができません。ですが、江戸時代初期から中期にかけて地唄として伝来したものであると言われています。このあやきりを踊り継いできたのは、瀬田地区の男子中学生たちでした。

しかしここ数年は、あやきりを踊る男子中学生の数が減って毎年夏休みに行われている練習も今では行われなくなっていました。

そこで私たち一年生の数人が文化祭でこのあやきりを踊ることになつたのです。私の父は指導者として学校に来て指導してくれていました。あやきりは指と指の間に綾を挟むため皮がむけたり、まめがでたりしていました。それに基本姿勢が中腰なので、見かけに

よらぎつかつたようです。

しかし、文化祭当日はあやきりがめあてで来たんだ、という地域の方もいてとても嬉しかったです。練習の期間が短かったにもかかわらずみんなの動きはそろっていったし、一人ひとりの動きも機敏で予想以上に完成度が高く、正直私は驚きました。体育館が大きな拍手にわきました。

私は今回「あやきり」という郷土芸能が、この地域に長い間受け継がれてきたことを、私を含めたたくさんの人が知って、そしてそれを受け継ぐための良いきっかけになつたと思えました。対馬には数多くの伝統があります。

その伝統をこれから一体誰が守っていくのでしょうか。それは、対馬に生まれその伝統の中で育ってきた私たち以外にはないのです。受け継ぐために、私たちはもつと対馬に伝わっているものについて知ることがあります。まげをもたなければいけないと思

ます。

指導者の一人であった私の父はこういいます。伝統ある郷土芸能を絶やすることなく次の世代に伝えていくこと、そして昔から伝わる地域の思いをその踊りとともに残すこと、それが自分の使命なんだと思ひ、十数年間指導してきたんだ、と。

今まで受け継がれてきた伝統は人々の想いも一緒に受け継がれてきたものであり、私たちは簡単に放り出すことはできないのです。文化祭をきっかけに私は考えるようになりまし。私たち一人ひとりが地域の伝統や文化を守り続けていく後継者であるということそして、受け継ぐものは踊りの振り付けや機敏さだけではない。それを受け継いできた人々の想いも絶やすることなく受け継いでいくことが、私たちの使命なのだ、と。

対馬の霊峰白嶽。真下から見上げる白い岩峰は青空に突き刺さっているかのように見える。岩のわずかなくぼみには、日本で対馬にしかないチヨウセンヤマトツジやハクウンキスゲも生えている。いつ来てもすばらしい光景。

白嶽は日本系の植物と大陸系の植物が混じって生えていることで植物研究者にはよく知られた山でもある。白嶽の植物がその代表としてよく知られているが、島の植生を調べると全体的に日本の他地域に比べ大陸系の植物を多く産することがわかる。

これは数万年前、日本と大陸が陸続きであったときの名残であると考えられている。チヨウセンヤマトツジもその中のひとつであり鰐浦のヒトツバタゴ、海岸線や岩山を中心にして生えているハクウンキスゲ、清流のふちに生えるオオチダケサシなども大陸系の植物である。

寒さが厳しい一月下旬、雑木林の林縁でごく薄いピンクの小さな花をつけるツシマヒヨウタンボクの開花が対馬の春を告げる。満開

になるのはゲンカイツツジが咲き始める三月上旬である。

三月、雑木林、海岸線の林縁はゲンカイツツジが日毎にピンクの彩りを広げていく。波静かな海にピンクの絵の具を流し込んだように映るゲンカイツツジの美しさ。

## 花の美しい対馬

審議会委員 国分 英俊

間をおかずに日本では対馬にしか生えていない大陸系のナンザンスミレ、四月にはウスギワニグチソウ、アツバタツナミソウと次々に開花を始める。下旬にもなると岩壁を好んで生えるチヨウセンヤマトツジが満開となる。

五月上旬はあまりにも有名な鰐浦のヒトツバタゴの開花。数千本のヒトツバタゴが鰐浦の集落を取り囲んで開花し、白い花が海に映っているさまはまさしく「海照らし」の呼び名がぴったり。毎年行われるヒトツバタゴ祭りでは温かい鰐浦の人々の心にもふれることができる。中旬、ひっそりとチヨウセンニワフジ、チヨウセンキハギも開花を始める。

六月中旬になると海岸ではハクウンキスゲ、モクゲンジが黄色の鮮やかな花をつけ対馬に夏のはじまりを告げる。

七月上旬は世界中で対馬にだけしかないオウゴンオニユリが開花する。過去数回発生しているが、残念なことに自然の状態ではほとんど見ることはできない。下旬にはオオチダケサシ、ハナナズミなども開花する。

八月にはツシマギボウシが川の縁や道路脇に長い穂を出してうす紫の花をつける。

涼しい風が吹き始める九月はツシママコナの開花にはじまりツシマノダケ、ダンギク、世界中で

対馬にしか生えていないシマトウヒレンも花をつける。

対馬には千二百余種の植物が生えている。花のうつろいを見ているとあつという間に一年が過ぎる。対馬はまだまだ自然が豊かである。四季折々に変化しながら人々の目を楽しませてくれる対馬の植物たち。大陸と日本の間に位置するがゆえに特殊な植物を育ててきた対馬。これからも大切に守り続け、未来に引き継いでいくことが私たち今、対馬に住むものつとめであると思っている。ふるさと対馬の自然はほんとうにすばらしい。

「対馬の自然と文化を守る会の会員を募集しています。」

対馬の自然を愛し、歴史を学習したいと思っている、あなた、一緒に活動しましょう。詳細は、対馬市文化財課までお問合せください。

連絡 0920542341

# 国特別史跡 金田城の発掘

○歴史的・地理的環境

今からおよそ千三百年前、対馬市美津島町「城山（じょうやま）」（標高二七六m）の山復に「金田城」が築かれた。城といっても主要な遺構は石垣（石塁）と城戸だけで、一般的にイメージされる天守閣や櫓などは存在しない。

対馬の山中に金田城が築かれた背景には一体何があったのか。

天智二年（六六三）、朝鮮半島南西部にあつた百済国再興のため大和政権は援軍を派遣したが、白村江の海戦で唐・新羅連合軍に敗れた。この時、百済から亡命した貴族・軍人など、多くの人々が日本に渡ってきた。

敗戦の翌年（天智三年）には対馬、杵岐、筑紫に防人と烽を配置し連絡体制を整え防備を強化している背景には、唐・新羅の攻撃を恐れていたことである。

金田城の頂上付近は「火立隅」（ほたてぐま）の名が残り、烽の存在があつたことを窺わせる。ただし、遺構は現在まで確認されていない。

金田城の築城については、『日本書紀も』天智六年（六六七）十一月の条に、「倭国の高安城、讃岐国の屋嶋城、対馬国の金田城を築く」と記されている。築城に際して指導者の記録は残っていないが、白村江で戦いに敗れ渡来した百済の貴族、軍人の指導によるものと推測された。選地も十分な調査のうえで決定したと考えられ、

浅海（あそう）湾の南辺、三方を海に囲まれた「城山」の山復に総延長五kmを超える石塁を築いた。陸地部分は南側だけで、北と西側は急峻な断崖で来るものを寄せ付けない。東側は谷を抱く緩やかな地形のため、一・二・三ノ城戸を設け石垣を高く積み防御機能を強化している。谷部では六m以上の石垣が残っており、一ノ城戸周辺の石垣は後世に修築されたとされ、加工された砂岩が多く使われている。

## ○発掘調査

発掘調査は平成五年度から着手しており、これまでに土塁、掘立

柱建物（五棟）、城門（二ノ城戸・南門）が確認され城の全体像が見えつつある。

調査時は対岸の黒瀬地区から船で調査地近くの城戸に上陸し移動していた。一度現場に行くと呼びの時間までは移動手段がなかった。当時は携帯電話もなく緊急時には黒瀬に向かつて大声で叫び、船頭さんに知らせるようにしていたが幸いなことに、雨が降り現場を中止する以外は何もなく作業が出来た。

調査中は野生のシカも時々見られたが、最近ではイノシシが増えたせいかわ姿を見なくなった。調査の時期は九月〜十一月であつたため、蚊が多く全員が香取線香（煙が多く出る森林香を使用）を身につけて作業に従事した。石垣の周辺ではマムシも時々見かけ、少々慌てることもあつた。

## ○出土遺物

発掘調査で出土した遺物数は多いとは言えないが、一度の調査でコンテナ一箱（数十点）分確認さ

れている。遺物は須恵器が殆どで甕、杯片が多く完形品は殆どなかった。

代表的な遺物としては温石（おんじやく）が数点出土している。防人が使用していたと考えられ、言わば古代の「カイロ」である。石を火で温めた後に首からぶら下げたりして暖を取っていたのである。寒さ厳しい対馬の冬期、山中で任務に着いていた防人の労苦は並大抵のものではなかつたのであろう。

故郷や妻子のことを思い詠んだ歌が『万葉集』に残っている。

「対馬の嶺は下雲あらなふ

上の嶺に  
たなびく雲を見つつ偲ばも」

文化財課 田中淳也

「文化財通信」第二号

編集 対馬文化財保護審議会  
発行 行 年一回

発行責任者 対馬市教委文化財課  
連絡 先 対馬市教委文化財課内

0920・54・2341

\* 文化財課のお知らせ

○曲の郷土芸能、国立劇場で発表

二月十八日(水) 国立大劇場で開催されました平成二十年度国際民俗芸能フェスティバル(文化庁主催)に、曲郷土芸能保存会が対馬から初めて出演し、好評を博しました。

曲郷土保存会は平成四年に発足毎年お盆に初盆を迎える家を回って踊りをして供養しています。

今回文化庁の要請で、参加を承諾、毎日練習を重ねてきたものです。

現在曲地区に伝承されている盆踊りは、綾踊り、柳踊り、二本扇踊り、四つ竹踊りの四つがあり、今回は、二本扇踊りと柳踊りを披露しました。

対馬特有の伝統文化を、全国に発信し、改めて対馬を知らせる良い機会となりました。

対馬には、まだまだたくさんの方の伝統文化が残されています。

○古文書(経典類)調査の報告

三年計画で調査を始めた島内旧家や寺社にあるとされている文書、今回は、住職さんのご協力を得て、寺社に残されている経典類の所在確認と保存状態について調査しました。

第一回 八月十一日(月)

・美津島町加志

妙音寺(曹洞宗)

般若経六〇〇巻(六箱に収納) 原型を留めていない状態

第二回 八月十九日(火)

・美津島町鴨居瀬

高山寺(臨濟宗)

経本日本版(黄檗宗) 六〇〇巻(六箱に収納)

保存状態まず良好、欠番が二三巻あり、昭和五十六年に調査済み?

第三回 八月二十日(水)

・巖原町久田

延命寺(曹洞宗)

薬師本願功德経一千巻(十巻入り) ケース・百ケースに収納

保存状態は良くなく、欠損も二ケースあり。公的施設保存を希望している。

第四回 八月二十六日(火)

・上県町佐護東里

瑞雲寺(曹洞宗)

日本版大般若経六〇〇巻(六箱に収納)

保存は良好であるが、日干し、清掃などが必要。初代・二代は納経して、現在の経典は三代目

調査員

文化財保護審議会委員

小松勝助・山田賢治

齋藤弘征の各委員

歴史民俗資料館

山口華代学芸員

文化財課職員

島内の寺社に保存されている経典類は、現在わかっているだけでも、十カ所以上もあり、未確認を

含めると相当の数になることが予想されます。所在確認と同時に保存の現状調査・保護対策を計画的に実施していく予定です。

○柚谷家文書等、来年度から調査整理始まる

このたび、美津島町雑知在住の柚谷圭三さんから対馬市立図書館に、刊本類、和書・漢籍類などと一緒、対馬の歴史を解明する上で大変貴重な資料とされていた柚谷家の文書類(原本・複写本)その他近世文書類が、寄贈されました。現在、図書館に保存中で、来年度から調査整理を予定しています。

○御礼

第二号の表紙絵は、今年度子ども県展で特選に選ばれた久田中学校三年・山根那津乃さん、原稿一面は、久原中学校二年・糸瀬かおりさんにご協力いただきました。各学校ともどもありがとうございました。

